

## 半促成ハウスメロンの着果時期と果実形質

本岡 圭 (熊本県農業研究センター球磨農業研究所)

Kei MOTOOKA:

## Effect of Fruiting Time of Semi-forcing Culture on Quality of Melon

メロンの半促成栽培では、近年作型の無理な前進化や着果過多に伴う小玉化、急性萎凋の発生が問題となっている。そこで、播種期ごとの1番果、2番果の適切な着果節位、個数を検討し、収量確保による経営安定を図る指針とする。

## 1. 材料および方法

供試品種には「アンデス」を用い、1区5株、2反復で試験を行った。栽植様式は、畦幅2.5m、株間50cm(80株/a)で、子づる2本仕立てとした。施肥量はN:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=1.2:2.4:1.2(kg/a)とした。

試験1:播種期:1999年12月15日と9日後の24日の2回に分けて播種し、それぞれの播種期別の収量、品質について調査した。

試験2:着果節位:1番果を10~12節、2番果を19~21節の間に着果させる低節位区と、1番果を13~15節、2番果を22~24節の間に着果させる高節位区とを設け、比較検討した。

試験3:着果個数:株当たり1番果を2果(1,600玉/10a)、3果(2,400玉/10a)、4果(3,200玉/10a)着果させた場合の収量・品質、また2番果に及ぼす影響を検討した。なお、2番果の着果個数は株当たり2果(1,600玉/10a)とした。

## 2. 結果および考察

12月15日播種は1月25日定植、1番果、2番果の交配ピークはそれぞれ3月20~22日、3月31~4月3日となり、12月24日播種は1月31日定植、交配ピークはそれぞれ3月23~26日、4月3~6日となった。成熟日数は59~60日であった。

1番果の着果率および1果重が優れるのは、遅い播種期、高節位着果、着果個数は2果であり、秀品率は着果個数のみの影響を受けた(第1表)。

一方、2番果においては、着果率や秀品率は1番果の着果個数が少ないほど良くなり、加えて着果率は高節位のほうが優れた。また1果重は播種期の遅いほうが肥大した(第2表)。

この結果、2番果まで含めた上位等級収量は、いずれの播種期でも高節位に2果着果させた区が優れ、12月15日播種で2トン/10a、12月24日播種で3トン/10a弱望めた(第1図)。

またこのときの粗収入額を、1995~2000年までの熊本県産「アンデス」等階級別平均単価を基に計算すると、前者で約87万円/10a、後者で約124万円/10aとなった(データ省略)。

なお、果実の糖度に関しては、1番果、2番果とも14~15%あり、食味も良く、果実品質に関しての問題点はなかった(データ省略)。

以上のことから、12月15日播種という前進化栽培は、

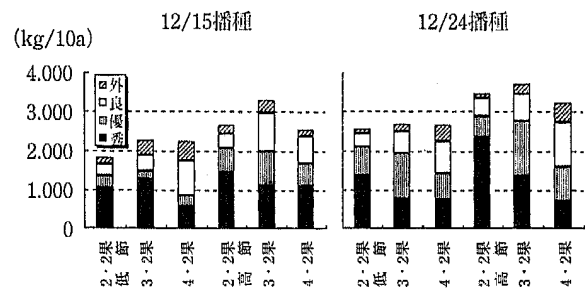
果実が小玉化したため収入面でのメリットはあまりなかった。ただ気象災害によるリスク分散や労力分散による規模拡大を図るためには、播種期をずらした栽培も必要と考えられる。その場合、この栽培時期では高節位に1番果2果、2番果2果に着果制限したほうが良い。

第1表 播種日ごとの1番果の着果率・1果重・秀品率

着果節位	着果個数 (果/株)	12/15播種			12/24播種		
		着果率 (%)	1果重 (g)	秀品率 (%)	着果率 (%)	1果重 (g)	秀品率 (%)
低節位	2	90	751	67	95	945	68
	3	80	736	52	97	808	34
	4	84	636	30	81	780	31
高節位	2	91	913	55	100	1,108	70
	3	97	820	38	100	936	44
	4	80	772	46	89	837	26

第2表 播種日ごとの2番果の着果率・1果重・秀品率

着果節位	着果個数 (果/株)	12/15播種			12/24播種		
		着果率 (%)	1果重 (g)	秀品率 (%)	着果率 (%)	1果重 (g)	秀品率 (%)
低節位	2・2	55	831	45	75	942	27
	3・2	60	873	58	50	1,015	9
	4・2	41	795	0	42	940	10
高節位	2・2	91	921	45	100	1,051	60
	3・2	100	864	25	96	950	17
	4・2	41	888	33	59	917	8



第1図 播種日ごとの10a当たり等級別収量